

教職員の皆様には、二学期もご尽力いただき、心より感謝申し上げます。行事や授業の忙しさに加え、子どもたちの心や生活に変化が生じやすい時期であるため、悩まれる場面もあったのではないのでしょうか。スクールソーシャルワークは、子どもを取り巻く環境や背景に目を向け、学校と一緒に子どもの成長を支えるシステムです。スクールソーシャルワーカー（SSW）がどんな視点で考えているのかを知っていただくことで、よりよい連携が生まれます。本号では、スクールソーシャルワークの基本的な考え方と、各校で実施された会議の工夫を紹介します。

スクールソーシャルワークの基本的な考え方



1. 子どものとらえ方：子どもは自ら考え、選び、行動する力がある



これまでの社会では「子どもは未熟で、大人が教えて導く存在」という考え方が主流でした。

しかし、スクールソーシャルワークでは、「子どもにも自分で考え、選び、行動する力がある」と考えます。SSWは問題を解決する人ではなく、子ども自身が自分の力で問題に向き合えるように、環境や条件を整える支援者です。そのため、支援は「子ども・家庭・教職員・SSW・関係者が一緒に考える協働のプロセス」として進められます。

2. 問題のとらえ方：個人ではなく「環境との関係性」

スクールソーシャルワークでは、問題を「その子自身の問題」としてだけではなく、その子と周囲の環境とのアンバランス＝不適合状態としてとらえます。例えば、学校のルールや家庭の状況、地域の支援体制、人間関係などが、子どものニーズに合っていないことで困りごとが起きている場合もあります。対応の方法は2つあります。

- ① 子どもが環境にうまく対応できるように力をつける支援
- ② 環境を子どものニーズに合わせて調整する支援

SSWは「本人」と「環境」両方に働きかけ、よりよい関係をつくる支援者です。

このような考え方は、学校で子どもと関わる際にも役立つのではないのでしょうか。

『この子に何が足りないか』だけでなく

『この子が安心して力を発揮できる環境をどう整えられるか』

についても一緒に考えてみませんか。

参照：文科省「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」（報告書）平成18年5月



発見！会議のひと工夫（特定を防ぐために一部加工しています）

工夫 その1. 話し合い（小学校低学年 離席が多い）

- ① 参加者全員の顔が見える丸テーブル
- ② 経過や対応方針をA4一枚にまとめ、共有
→ところどころしか話を聞けない人も、スタート地点が同じになりました。
- ③ 専門家を上手に活用
 - SCに「なぜこの子はこんな行動をするのか？」を聞く
→理由がわかると納得でき、指導だけではない方法が考えられました。
 - 対応に困った具体的な場面について相談
→「〇〇の理由で問題を起こしているから、こういう対応が良いよ」と明確なアドバイスが受けられました。



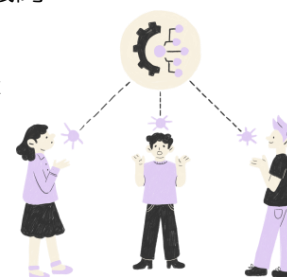
工夫 その2. 校内支援会議（小学校中学年 暴力を起こす）

- ① 事前に学校とSSWで「どんな話し合いにしたいのか」を具体化
- ② 校内のリーダー役が話し合いの中心になり、わかりやすく穏やかに参加者に話しかける
- ③ その子を支援している市職のスタッフも参加
→勤務時間内に話し合えるように、事前に資料や会議室を準備し、下校後すぐの時間を活用していました。
- ④ その子の置かれた環境を共有し、一つ一つの場面にに対し「こうしたらうまくいったよ」という工夫を伝えあう
→“お互いに助け合おう”という雰囲気広がりました。
- ⑤ 教職員一人一人の役割を明確にする
→受け止める人、導く人・・・いま課題が目立つ子だけでなく、クラス全体の支援を考えられるようになりました。



工夫 その3. ケース会議（中学校 特別支援学級 不登校）

- ① コーディネーター役が校内の情報を素早く集約し、関係機関との窓口を担う
→やり取りがタイムリーに行われ、関係機関を含めた支援のネットワークができあがりました。
- ② アセスメントを含めた会議録を共有
→参加者全員が同じ情報を共有することで、支援が前回の会議の上に積みあがっていくことを実感できました。
- ③ 子ども・家庭・学校・専門家で、その子や家庭にあった社会資源を考える
→社会資源の効果的な利用につながりました。



ここで紹介した工夫は、あくまで一例です。学校や自治体ごとに状況は様々ですので子どもの実態に合わせて対応いただければと思います。

日々子どもたちのために努力されている教職員の皆様に、心から敬意を表します。
年末年始、どうぞ少しでもゆっくりとした時間を過ごせますように。
来年も、必要な際にはお気軽にご相談ください。

